

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢  
第4号（2017年度） 2018年3月発行

# インターンシップ活性化の一手法 —LMS 掲示板上的日報共有による学習支援サイクルの構築—

前田 吉広



# インターンシップ活性化の一手法

## —LMS 掲示板上の日報共有による学習支援サイクルの構築—

前田 吉広\*

A Method for Activating Internship:  
Construction of a Learning Support Cycle by Sharing Daily Report Using an ICT Bulletin Board

Yoshihiro MAEDA\*

### ABSTRACT

In order to consider what structure of learning system could be beneficial to the students of Fukuyama University, we analyzed the present situation regarding the positioning of regional studies as a liberal arts subject. Regional studies are an important component of a university education as it facilitates students becoming active members of society in the area where they live. One aspect of regional studies, regional science, is a necessary subject to execute this mission. In the course of gaining a bachelor's degree, it is important to prevent division between liberal arts education and professional education. Regional science in the form of collaborative education with the community can play an important role in joining the two areas. In this paper, we propose the creation of an educational system to acquire liberal arts necessary as a citizen by constructing a mechanism to establish unique qualifications based on classes of regional science in liberal arts courses.

キーワード：インターンシップ、LMS、日報、シェア

### 1. はじめに

福山大学では、キャンパスを構える広島県東部地域（備後地域）の企業を主な受け入れ先として、平成 22 年度より独自のインターンシップを推進してきた。平成 24 年度には、中四国 18 大学の連携の下、文部科学省の助成金である「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」を獲得し、新たに設置した専門の運営組織「自分未来創造室」を中心に、インターンシップ事業の拡充に力を入れている。これらの取り組みが功を奏し、インターンシップ参加企業数および参加学生数ともに年々増加の一途を辿っているが、受け入れ規模の拡大に伴い、従来の方法（専任スタッフによる個別の学生対応）では、多様化する参加学生一人ひとりのニーズに応じた指導や課題解決をおこなうことが困難になりつつある。また、これらの指導や課題解決の内容は、他の学生が求めるものと重複・類似するケースも多く存在するが、従来の個別面談では、学生ごとにスタッフが何度も同様の説明をしなければならず、効率的とは言えない状況であった。

本稿の目的は、インターンシップにおけるこれまでの対面型コミュニケーション方法を見直し、ICT を活用することで、場所や時間に囚われず、大人数の学生に対して個別の指導と課題解決が可能となる方法を模索することを試みるものである。

---

\* 大学教育センター講師

## 2. 研究の目的

従来、インターンシップ期間中の学生の学びや悩みについては、大学側が即時に把握することが難しく、インターンシップの受入企業側にそれらの対応の大部分が委ねられている状況であった。そのため、学生によっては自分の考えや想いを企業側の担当者に上手く伝えることができず、改善を望みながらも未解決のまま実習を終えたり、実習後の事後研修で学生と話をした際に初めて問題が明るみになるといったケースが、これまでのアンケート結果やヒアリングなどを通じて一定数把握できている。また、インターンシップ先によっては指導経験の浅い若手担当者が指導を担当することや、業務繁多のため、学生に対する十分な指導やサポートが難しい職場も存在し、実習先によって学生の学びを深めるための支援に大きな差が生まれていることも問題とされている。これらは、100名を超える学生一人ひとりのインターンシップ先での様子を、限られた教職員のみでリアルタイムに把握することが現実的に難しいことに加え、本学が主として推進しているインターンシップが夏季休業期間中の限られた期間におこなわれるものであるために、事前研修終了後は教職員が学生と直接的な接点を持つ機会が無く、全てのインターンシップ実習が終了した後におこなわれる事後研修まで学生の相談や悩みに気づき、対応することができないことが主な要因としてあげられる。更に、近年ではインターンシップに参加する学生の学年や参加目的などにおいても多様化が進んでおり、教職員に求められる助言やサポートも以前と比べて幅広くなっている。もし、インターンシップ期間中に学生一人ひとりの相談や悩みについて気づくことができたとしても、その対応に割くことができる人員とスキル、時間といったリソースをどのように捻出するかについても、大きな課題の一つと言える。

本稿で取り上げる取り組みは、これまで受け入れ企業に対応の大部分を委ねていたインターンシップ期間中の学生の教育的および心理的なサポートを、LMS (Learning Management System) を活用した相談および対応によって、場所や時間といった制約を取り除き、一人でも多くの学生の課題解決を支援しようとするものである。また、それらの対応プロセスを他のインターンシップ参加学生にも公開し、共有することで、学生間の共同体意識を育み、取り組み意欲の向上につなげるとともに、同様の相談・質問数の削減と、他者の経験や助言を活用したリフレクションへとつなげることを目的としている。

## 3. 先行事例との違い

近年、LMS を活用した学習支援の試みは、教室内外を問わず数多く存在している。LMS を用いた授業改善を積極的におこなっている関西大学では、2003 年から全学的に LMS を導入・整備し、大人数講義において学生と教員、学生同士のやりとりを促す場としてインターネット上の掲示板を利用した授業を実践している（岩崎ほか 2008）<sup>1</sup>。近年では、こういった情報通信技術をどのように活用して、教員や学生の情報を収集、分析、フィードバックすれば学習・教育が促進されるかを研究するラーニング・アナリティクスの研究も進んでおり、九州大学では、オープンソースの e ラーニングプラットフォームとして有名な”Moodle”や e ポートフォリオシステムの”Mahara”、電子書籍配信サービスの”BookLooper”の利用に対してラーニング・アナリティクスを実践し、学生の学習行動や知識構造を可視化することで授業改善につなげている（緒方、2017）<sup>2</sup>。本研究に近い LMS の活用事例としては、平成 28 年 7 月に開催された株式会社朝日ネット主催の第 18 回 manaba セミナーで紹介された学習院大学の課題探求型現地研修（短期海外研修）<sup>3</sup>の実践事例が挙げられる。その事例では、海外実習中の学生の様子を LMS の日報で把握し、教職員が毎日フィードバックを提供することで、場所や時間の制限を超えた個別指導がおこなわれていた。また、研修前の下調べや研修後の報告書作成なども LMS を利用して実施されており、それぞれが時間軸に沿って振り返ることができるポートフォリオとなるように設計され、研修を通じた学びをしっかりと振り返ることができるようにも考慮されていた。

この取り組みを参考にしつつ、本学のインターンシップにおける LMS の活用を検討するにあたり、考慮したことが3つある。1つ目は「投稿することに対する精神的ハードルを下げる」とである。学習ポートフォリオとしての側面を持たせようとするばかりに、投稿内容の充実を学生に求め過ぎると、投稿の負担が大きくなり、最悪の場合は投稿者の減少にもつながると考えた。取り組みの目的である「インターンシップ期間中の指導や課題解決」を最優先に考えると、投稿者数の減少による指導機会および課題把握機会の損失は避けたい。2つ目は「投稿内容を、教職員だけでなくインターンシップ参加学生全員で共有すること」である。投稿内容の閲覧・コメントが可能な権限を、他のインターンシップ参加学生にも付与することで、他者の投稿内容から自由に学ぶことができる環境を整えるとともに、そこから学生間のコミュニケーションが誘発され、助言や課題解決へとつながっていくことも期待した。3つ目は「予め設定されたテーマに従って投稿すること」である。前述した学習院大学での事例では、学生の投稿内容に応じて教員が質問内容を毎日変更するため、学生は日々異なる質問に対する意見を回答することが求められた。これは、学生一人ひとりの学びのニーズに教職員が応える仕組みとしては理想的な方法だと思われるが、対応可能な教職員の人数と、担当する教職員に高度なカウンセリングスキルが求められる点において、現実的に導入が可能な組織が限定される。限られた教職員で一人でも多くの学生対応をおこなうには、教職員だけでなく、インターンシップ参加学生も含めた大学関係者全員で一人ひとりに対するサポートをおこなう体制を築く必要があり、そのためには投稿内容に一定のルールを課し、関係者全員で共有化することで理解を促し、誰もが容易にコメントができるように考慮することが肝要である。これらの3つのポイントの違いを比較してまとめたものが表1である。これらの改変は、取り組みに対する学生のモチベーションを維持することと、限られた教職員の対応負担を軽減させるために必要不可欠であると考ええる。

表1：本学の取り組みと先行事例の比較

	本学の取り組み（福山大学） 5日間前後の夏季インターンシップ	紹介事例（学習院大学） 2～3週間の短期海外研修
実施目的	・実習期間中の個別学習支援及び相談対応 ・学生間の相互学習の促進と情報共有	・海外研修中の危機管理 ・研修前・研修中・研修後の個別指導
位置付け	記入必須のワークシート（2種類）と報告書に加えて、任意で実施する内容のため、投稿することに対するハードルを下げる	参加者は、研修前、研修中、研修後の全プログラムにおける報告・提出物を、LMSを通じて提出する
機能と公開範囲	掲示板機能を使用し、投稿内容はインターンシップ事業に携わる教職員だけでなく、インターンシップ参加学生全員ともオープンに共有する	レポート提出機能を使用し、投稿内容は主として教職員（学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学）、および旅行社スタッフが閲覧できる
投稿内容	誰もが容易にコメントができるように、予め決められた4つのテーマ（変更なし）に従って投稿する	学生の投稿内容に応じて、返信をおこなう教職員が質問したいこと（変更あり）を投稿する

## 4. 研究の方法

### 4-1. 概要

本取り組みは、福山大学で利用している LMS（manaba course<sup>4</sup>）に標準装備されている「掲示板」機能を利用し、実習期間中毎日 21 時までに、次の4つのテーマ（今日の振り返り、明日への意気込み、みんなと共有したいこと、今日のひとこと）について公開投稿するというシンプルなものである。

「掲示板」を用いて内容を他者に公開する日報という取り組みから、本学では「シェア日報」と名付けて運用している。毎日の投稿を手間を感じ、シェア日報の投稿が不定期になってしまう学生を減らすため、投稿時の文字数を 100 字程度（Twitter でつぶやき程度）と定めた。実習先から帰宅する途中の隙間時間でも、スマートフォンを使って気軽に投稿・閲覧することができる。また、積極的に投稿・閲覧したいと思えるように、思ったことを気軽に投稿できる「今日のひとこと」を投稿条件の一つに加えたり、全ての日報に対して翌朝までに必ず教職員が返信コメントをおこなうことをルールとし、投稿者が毎朝チェックしたくなるようにしたりと工夫を凝らした。さらに、疑問や悩みを打ち明けやすい雰囲気を作るため、堅苦しくない文面での返信コメントを心掛けたり、掲示板への投稿ルールとして、否定的なコメントは避け、ポジティブなコメントを心掛けるよう参加者全員に伝えたりした。このように、学生の投稿負担を最大限に軽減することで取り組む学生の数を最大化し、インターンシップ期間中の問題解決のサイクル（図 1）を回していくことを試みた。

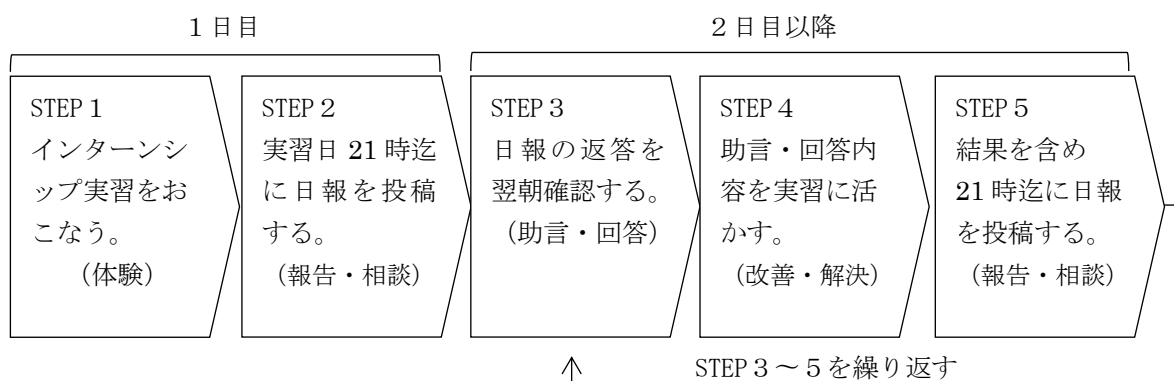


図 1：シェア日報による問題解決のプロセス

#### 4-2. 対象者

このシェア日報は、平成 28 年度のインターンシップ参加学生 113 名と平成 29 年度の参加学生 103 名の計 216 名を対象として実施された（表 2）。インターンシップでの単位取得希望者は投稿内容を評価の対象とし、それ以外の学生については任意参加とした。シェア日報の目的および内容は、インターンシップ実習前におこなわれる事前研修を通じて参加学生に周知され、事前に 1 回の投稿練習をおこなった。投稿練習は本番と同様、翌朝にはフィードバックが届くように教職員が返答をおこない、シェア日報を通じて得られるメリット（例：自身の投稿に対して、他者から共感や助言が得られること）を事前研修中に体感できるよう考慮し、単位を希望しない学生にもシェア日報への参加を促した。

表 2：シェア日報の対象者数と学年ごとの人数の内訳

		H28 年度	H29 年度	合 計
対象学生数 (インターンシップ参加者数)		113 名	103 名	216 名
学 年	4 年生	2 名	1 名	3 名
	3 年生	70 名	60 名	130 名
	2 年生	35 名	25 名	60 名
	1 年生	6 名	17 名	23 名

### 4-3. 掲示板の機能

今回利用した LMS (manaba course) の「掲示板」は、4つの質問内容に対応した専用の投稿フォームではなく、汎用性のある一般的な掲示板(図2)を用いているため、学生自らが本文中に4つの質問内容を記載して投稿するか、各質問ナンバーを記入するなどして投稿する必要がある。そのため、学生によって投稿内容や表現方法に違いが発生し、厳密に4つの質問それぞれに対する回答を比較、検証することは難しい。しかし、本学が利用している LMS (manaba course) の掲示板は一般的に広く認知されている投稿フォームに近いものであるため、利用者である学生にとっても操作方法に困ることなく、事前研修で最低限の説明をおこなえば容易に使用が可能なツールだと判断した。

図2 : manaba course に標準装備されている「掲示板」のコメント投稿フォーム

### 4-4. 投稿テーマとフィードバック

シェア日報として学生が日々投稿するテーマは、自身の成長につなげるものが2種類、インターンシップ参加学生全員で共有する知見とするものが1種類、投稿者が投稿したいことを自由に投稿するものが1種類の合計4種類(表3)とした。それぞれのテーマにおける投稿条件や文字数制限はつけず、4種類全ての回答を合わせて100字程度とすることで、投稿に対する心理的なハードルを抑えた。また「今日のひとこと」は、他の3つのテーマへの投稿内容からは把握することの難しい、投稿時の学生の考えや気持ちを察することができる自由記述項目とした。

学生の投稿に対するフィードバックは、投稿期限として設定した21時以降から翌朝までにかけて、自分未来創造室の教職員3名(専任教員2名、非常勤職員1名)が分担しておこなった。フィードバックの際は、シェア日報を閲覧することのできる実習参加学生全員にとって有益な情報となるように、回答の一部を一般化するなどの工夫を試みるよう、3名の間で意識の共有をおこなったが、フィードバックの具体的な内容については、各教職員の裁量に任せることとした。そうすることで、三者三様の視点を活かした学生対応が可能な体制を整えた。

表3：4種類の投稿テーマと目的

	テーマ	目 的
1	今日の振り返り	その日の実習を通じて、何を得たのか、何が変わったのか、どのような能力（社会人基礎力）が伸びたのかを振り返ることで、成長を実感し、自分にとっての意味づけへとつなげる
2	明日への意気込み	振り返りによって得られた学びを確認して終わるのではなく、自身の変化・行動へとつなげるため、翌日どのような取り組みをおこなうかについて具体的に考える習慣をつける
3	みんなと共有したいこと	自身の体験から得た学びを他者に伝えることを通じて、学んだことに対する理解を促すとともに、閲覧する学生全員にとって役立つ情報が得られる場所へと育てあげる
4	今日のひとこと	あえて具体的なテーマを定めず、学生が自由に投稿できる余白を作ることで、上記3つのテーマからは何うのが難しい学生の素直な気持ちや考えを察することにつなげる

## 5. まとめと成果

平成28年度および29年度のインターンシップ期間中のシェア日報の実績が表4の通りである。2年間で計951件の投稿（学生：555件、教職員：406件）がおこなわれた。学生の投稿総数555件のうち日報の合計数は350件、残りの205件は日報に対するコメントであった。両年度ともにインターンシップ期間中毎日投稿されるシェア日報に対し、翌日朝までにおこなわれる教職員からの返信コメントについては、土日を含め滞りなく実施された。

表4：平成28、29年度「シェア日報」の投稿実績

	平成28年度	平成29年度
実施期間	50日間 (平成28年8月9日～9月27日)	44日間 (平成29年8月9日～9月21日)
投稿総数	522件 (学生：304件、教職員：218件)	429件 (学生：251件、教職員：188件)
日報数	186件	164件

### 5-1. 投稿内容のまとめ

はじめに、シェア日報に投稿された全951件の投稿内容について、教職員による返答が学生に対して何らかの影響を与えたと思われる部分と、学生同士のやりとりが何らかの影響を与えたと思われる部分の2点について抽出を試みた。抽出の方法は、日報の投稿に対しておこなわれた返信コメントの中の記述内容が、投稿者の考えや気持ちに変化を与えたかどうかで判断をおこなった。表5は、前述した2つの視点において抽出された箇所を整理したものである。

表5：学生の考えや気持ちに変化を与えたと考えられる記述箇所の数

	教職員の返答が学生に対して何らかの影響を与えたと考えられる記述	学生同士のやりとりが何らかの影響を与えたと考えられる記述
抽出数	36件 (28年度：12件、29年度：24件)	91件 (28年度：66件、29年度：25件)



教職員の返答が学生に対して何らかの影響を与えたと考えられる記述のうち、学生の投稿した日報に対して教職員が問いを返して考察の深堀を促す「振り返りの促進」によるものが 17 件 (47.2%) と最も多く、次いで、インターンシップ先での緊張や恐れに対する共感や励ましのコメントといった「不安の理解・解消」によるものが 8 件 (22.2%) という結果が導き出された。学生同士のやりとりが何らかの影響を与えたと考えられる記述については、投稿した学生に対する励ましの「応援コメント」によるものが 41 件 (45.1%) と最も多く、投稿内容を閲覧することで得られた学びを返信した「投稿内容の共有による学び」が 19 件 (20.9%)、閲覧者が投稿者に対して自らの経験や知見から助言をおこなう「投稿者へのアドバイス」が (17.6%)、投稿者の体験談に対する「共感コメント」が 12 件 (13.2%) となった。これらの結果より、シェア日報を通じた教職員とのやりとりに一定の教育効果が認められたとともに、学生間でのやりとりが投稿者の実習意欲向上にもつながったことが読み取れる。また、学生同士のやりとりにおいて多く引用されていた部分が、投稿テーマの 3 つ目にあった「みんなと共有したいこと」と、4 つ目の「今日のひとこと」であったことから、これら 2 つのテーマが閲覧する学生にとって関心の高いものであったことが確認できた。

次に、シェア日報への投稿内容から、学生がインターンシップ期間中に抱える課題や問題の抽出を試みた。抽出方法は、日報の投稿テーマの一つである「今日の振り返り」の中で、何らかの失敗や解決されないままの課題について記載されているものを選び出すこととした。表 6 は、シェア日報を実施した 2 年間で抽出された課題の数をまとめたものである。

表 6：シェア日報を通じて抽出することができた実習中の課題数

	平成 28 年度	平成 29 年度	合 計
課題数	34 件	16 件	50 件

計 50 件の抽出された課題を、投稿者である学生本人に起因すると思われる課題と学生の受け入れ先企業側に原因があると思われる課題の 2 種類に分類すると、前者 49 件 (98%)、後者 1 件 (2%) に整理することができた。更に、学生に起因する課題を「精神面における課題」「能力・体力面における課題」「態度面における課題」の 3 種類に分類すると、能力・体力面における課題が 29 件 (58%) と過半数を占め、次に精神面における課題が 16 件 (32%)、残りの 4 件 (8%) が態度面における課題と整理された。最も多くの課題が抽出された「能力・体力面における課題」においては、インターンシップ実習中に取り組む業務や課題の専門性や難易度が学生の想像以上に高く、理解が及ばないということで、自身の能力不足を課題として挙げている投稿や、留学生による日本語や専門用語の理解の難しさなどが具体的な課題として浮き彫りになった。「精神面における課題」では、実習先で上手く立ち振舞えるかどうか不安に感じているといった、緊張やストレスによるものが大多数を占めた。当初は、インターンシップに参加している学生が自身の考えや悩みを企業側の担当者に上手く伝えられないことへの対策として、企業に対する要望や課題を抽出することも目的の一つとしていたが、この 2 年間の実績としては企業に対する要望や課題は 1 件しか抽出することができなかった。「態度面の課題」では、自らやるべきことを探して行動しなかったことに対する受け身の姿勢を指摘されたことが挙げられた。これらの結果より、本学の学生がインターンシップ中に抱える課題や問題の多くが、企業側ではなく学生側に問題があると学生自身が認識していることを把握することができたことは、教職員側の助言・支援を考慮する上で重要な視点を獲得することができたと考える。加えて、本学が主催するインターンシップの地元受け入れ先企業の多くが、学生にとって一定以上の満足度を満たすプログラムの提供をおこなっていることを証明することにもつながった。

## 5-2. アンケート結果のまとめ

続いて、インターンシップ実習後におこなったシェア日報に関する 2 年分 (平成 28 年度、29 年度)

のアンケートの有効回答数 180 名（未提出・不備あり 20 名）をもとに、シェア日報への取り組み状況に応じて A、B、C の 3 グループに分類（表 7）し、投稿・閲覧による効果を考察した。

表 7：取り組み状況により分類された 3 グループ

	平成 28 年度	平成 29 年度	合計
A. 掲示板への投稿・閲覧の両方を実施した	32 名	25 名	57 名
B. 掲示板の閲覧のみを実施した	37 名	31 名	68 名
C. どちらも実施しなかった	32 名	23 名	55 名
合 計	101 名	79 名	180 名

はじめに、シェア日報への投稿効果について考察をおこなう。投稿をおこなった学生グループ A に対する「Q. シェア日報の投稿は、役に立ちましたか？」という質問の回答は、投稿者の 98.2% を占める 56 名から「役に立った」との回答を得た（表 8）。その理由として最も多い回答は「実習内容の整理（59.6%）」であったが、「モチベーションの維持（43.7%）」や「学習の促進、やるべきことの明確化（35.1%）」にも一定以上の効果があったことが伺える。

表 8：学生グループ A のみを対象とした質問と回答

Q. シェア日報の投稿は、役に立ちましたか？
A. 役に立った …………… 56 名 (98.2%) 役に立たなかった … 1 名 (0.18%)
Q. 役に立った理由として該当するものは？（上位 3 位）
1 位. 実習内容を整理できた…………… 34 名 (59.6%)
2 位. 返信がモチベーション維持につながった… 25 名 (43.9%)
3 位. 返信コメントが勉強になった…………… 20 名 (35.1%)
3 位. 翌日やるべきことが明確になった…………… 20 名 (35.1%)

対象：学生グループ A（57 名）のみ

次に、閲覧に関する効果を考察する。期間中にシェア日報を閲覧した学生グループ A、B に対し「Q. シェア日報の閲覧は、役に立ちましたか？」という質問をした結果、125 名中 120 名から「役に立った」との回答を得られた（表 9）。最も多かった理由は「自分も頑張ろうという意欲につながった（49.6%）」というものだった。この結果から、シェア日報に投稿しない場合においても、閲覧することで学生のモチベーション向上に一定の効果があることが導き出された。

表 9：学生グループ A、B を対象とした質問と回答

Q. シェア日報の閲覧は、役に立ちましたか？
A. 役に立った …………… 120 名 (96.0%) 役に立たなかった … 5 名 (4.0%)
Q. 役に立った理由として該当するものは？（上位 3 位）
1 位. 自分も頑張ろうという意欲につながった… 62 名 (49.6%)
2 位. 他者の実習内容との違いを知れた…………… 53 名 (42.4%)
3 位. 自分にはない視点や考えを得られた…………… 47 名 (37.6%)

対象：学生グループ A（57 名）、B（68 名）、合計 125 名

更に、シェア日報を閲覧することの効果詳しく検証するため、上記質問への回答を学生グループ A と B で比較したところ、役に立った理由の回答結果に大きな違いが見られた（表 10）。学生グループ A では、最も多い回答が「他者の実習内容との比較から違いを知れた（31 名、54.4%）」であったのに対し、学生グループ B では「自分も頑張ろうという意欲につながった（36 名、52.9%）」が最も多い結果となった。このことから、学生グループ A は投稿と閲覧の両方に取り組んだことで、自身のインターンシップ経験と他者の投稿を比較して考察するという、閲覧だけでは難しい新たな視点・考えを得ることができたのではないかと考えられる。

これらのアンケート結果より、LMS を活用したシェア日報は、本取り組みの目的であったインターンシップ実習期間中の個別学生対応を可能とし、実習に対する参加意欲の向上と学びを深めるリフレクションに一定の効果があったと考えられる。

表 10：学生グループ A、B の回答比較

	Q. シェア日報の閲覧が役に立った理由として該当するものは？（上位 3 位）	
	学生グループ A（57 名）の回答順位	学生グループ B（68 名）の回答順位
1 位	・他者の実習内容との違いを知れた（31 名、54.4%）	・自分も頑張ろうという意欲につながった（36 名、52.9%）
2 位	・自分にはない視点や考えを得られた（27 名、47.4%）	・他者の実習内容との違いを知れた（22 名、32.4%）
3 位	・自分も頑張ろうという意欲につながった（26 名、45.6%）	・自分にはない視点や考えを得られた（20 名、29.4%）

## 6. 結論と今後の課題

平成 28 年度および 29 年度の 2 年間、LMS を活用してインターンシップ期間中の学生の様子を日々把握し、教職員によるフィードバックに加えて、学生間の相互支援を促してきた本シェア日報の取り組みは、当初の課題であった対面型コミュニケーションに基づく学生対応の仕組みに大きな変化をもたらし、一定の改善効果を導き出すことができた。特に、シェア日報に関するアンケートの結果より、投稿が役に立ったと回答した学生数が全投稿者 57 名中 56 名（98.2%）、閲覧が役立ったと回答した学生数が全閲覧者 125 名中 120 名（96%）と高い割合を示していることは、効果の高さを証明する結果として考えることができる。インターンシップの受け入れ環境が企業によって大きく異なる現状においては、実習を通じた学びの振り返りが実習プログラムの中に組み込まれていない場合も考えられるため、学生は日々の取り組みに対する意味付けを十分におこなうことができず、労力に見合った成長につながらないインターンシップになってしまう可能性も考えられる。インターンシップを、キャリア観・職業観を養う効果的な教育手法の一つとして機能させるためには、それをコーディネートする教育機関である大学が学生と企業をつなぐハブとなり、学生の就業体験を、彼らの確かなキャリア形成へと導くための学習プログラムを構築し、積極的に支援をおこなうことが必要であると考えられる。今回実施したシェア日報の取り組みは、そうした大学に求められる役割を、ICT を利用して効率的に担い、インターンシップを通じた学習効果を高めることに役立ったと言えるのではないだろうか。

一方で、改善に向けた今後の課題についても数多く導き出すことができた。シェア日報の投稿者数が全体の 3 分の 1 に満たない 180 名中 57 名（32.7%）という現状や、学生間の相互支援の投稿が一部の学生に限られていることなど、シェア日報の投稿および閲覧を通じた学習機会の恩恵を受けている学生数が相対的に少ないことへの対策は、今後の課題として考えられる。また、シェア日報を通じた学習効果の測定方法や効果的な投稿ルール、フィードバックのあり方などを導き出すためにも、投稿内容についてより多面的に分析をおこなう必要がある。更に、今回の返信コメントはキャリア教育

担当の教職員3名によっておこなわれたが、インターンシップ参加学生の増加に伴って返信作業が増大してしまうため、負担を軽減するための効率的な運用方法についても合わせて検討を進める必要があると考えられる。

## 謝辞

インターンシップ期間中、毎日大量に届く学生からの日報投稿に対し、コメントの返答作業をサポートして頂いた同僚の福山大学大学教育センター自分未来創造室の津田将行講師、松浦未奈さんに改めて感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) 岩崎千晶・久保田賢一・冬木正彦（2008）「LMS の活用事例からみる授業改善の試みと組織的支援」『教育メディア研究』 Vol.14, No.2. pp. 1-10.
- 2) 緒方広明（2017）「大学教育におけるラーニング・アナリティクスの導入と研究」『日本教育工学会論文誌』 41, No.3, pp. 221-231.
- 3) 村松弘一（2016）「留学先と大学をつなぐ manaba の活用～アジア各地での学びを遠隔サポート～」、第18回 manaba セミナー。
- 4) 教育支援サービス「manaba」「manaba course」株式会社朝日ネット <http://manaba.jp/>, 2018.2.5 閲覧。